

●特集 グローバル人材育成と日本の英語教育

グローバル人材育成における英語教育の役割

中嶋嶺雄

はじめに

ただいまご紹介いただきました国際教養大学の
中嶋です。第一回のシンポジウムに御招き頂き大
変光栄に存じております。

さっそく本日のテーマに迫っていきたくと思
いますが、私が頂いたテーマは「グローバル人材
の育成における英語教育の役割」です。グロー
バル人材ということが色々ところで言われてお
りますが、そのグローバル化とは一体何であるか
という問題から入っていきたくと思います。ま
ず「グローバル化と国際化とはどう違うのか」と
いう問題。国際化も日本はまだ遅れていると言
われながらも、ここ数年はグローバル化という
言葉が非常に強く叫ばれるようになりました。
その違いについてお話しし、それに対して日本
は非常に閉鎖的であって「知の鎖国、intellectually closed shop」という状況がまだ続いているという事を振り返ってみたいと思います。それから国際教養大学の特色について少し紹介させて頂き、外国語教育の在り方についての私の意見を申し述べたいと思います。

グローバル化と国際化

グローバル化 (Globalization) というのはいつから英語として使われたのでしょうか。これは、かなり色々調べたのですが1944年にカナダの社会学者 Oliver Raiser と Blodwn Davies が *PLANETARY*

DEMOCRACY という本を書いています。この本の中で初めて使われたのです。それは rebuild society, create the World of Tomorrow. 「明日の世界をクリエイトしようじゃないか」そのような文脈の中で非常にポジティブな概念として出てきたのが globalism という言葉なのです。これに対して国際化 (Internationalization) は1945年2月に交わされたヤルタ協定の the commercial port of Dairen shall be internationalized の部分で初めて出てまいります。そして、Internationalization、Internationalize という言葉が名詞や他動詞として使われるようになったとみております。ソ連にとっては大連とか旅順をいかに自分のものにするかという事が当時の最大の利害でありました。グローバル化というのは立体的な概念であるのに対して、国際化というのは水平的な概念で、この大きな違いが大事なポイントだと思っております。このような中でグローバル化と国際化という言葉が初めてつかわれたと、私は調べております。

さて、それでは実際のグローバル化はいつから始まったのでしょうか。言葉としては今、お話ししたように第二次大戦末に出てきます。しかし実際に世界がグローバル化したのは、この20年くらいの事です。ソ連とアメリカとの冷戦が終焉した1991年11月、今から21年前です。そしてその2年前にはベルリンの壁が崩壊していきます。私はその時、東ベルリンのフンボルト大学に講演で招かれましたが、たいへんな歴史の転換が行われました。ベルリンの壁がこわれて東欧が民主化され、ソ連が崩壊していく中で、IT革命が始まります。

2012年11月10日、ELEC 英語教育シンポジウム
基調講演 池坊お茶の水学院にて収録

(文責編集部)

「知の鎖国」と日本の大学

私は92年から93年まで、カリフォルニア大学サンディエゴ校の大学院で教鞭をとっていました。毎週、英語で3時間ぶっ続けで講義をすることは本当に苦行でしたが、それが私を鍛えてくれたと思っています。同時にアメリカの学生がいかに勉強するか。本当に宿題もたくさんあります。私のクラスは15~20人でしたが、学生と先生が真剣勝負で、次々に質問が浴びせられるようなインタラクティブな授業をやるのです。このときに教鞭をとった体験で「日本の大学はこんなことでいいのだろうか」ということを新聞のコラムに書きましたら、当時文部省の遠山敦子さんがそれを見て「中嶋先生ぜひ大学審議会の委員になって下さい」と言われました。それから中教審の委員にもなりました。アメリカである教授の自宅でどれだけ論文を書いているのかを尋ねられ、コンピュータにアプローチされると、画面いっぱい私の英語の論文が出てきました。これには本当にびっくりしました。一個人の研究業績が一人のパソコンに出てくるなんて考えられなかったわけです。ちょうどその頃まさにIT革命が進んでいきました。日本はまだワープロの時代だったと思います。93年くらいからようやくコンピュータが普及し始めてきます。東西冷戦の終焉とIT革命がまさに地球を立体的にしたのです。時差というものほとんど意味を持たなくなり、常に全世界と繋がっている。

こういう状況の中で日本の高等教育はどうであったか。グローバル化に背避するような反対の方向へ歩んでしまったのではないかというのが私の見方です。

1991年、グローバル化が始まる時に、大学設置基準の大綱化が行われ、かなり大学が基準を変えられるようになりました。その結果、外国語の教員があちこちに分属化されたり、センターに集中的に集められたり、これから本当にグローバル化によって外国語が必要となる時に、それと反対の方向に行ってしまったのです。おそらく当時の文部省の意図はそこにはなかったと思うのですが、結果的に、特に私学においてそのようなことが起



きてしまいました。そして、「教養教育の消滅」。大学の設置基準の大綱化によって教養学部や教養部などでの教養教育というものが多くの日本の大学から消えていきました。確かに今東京大学の教養学部がありますが、大学院の国際関係論課程を探そうと思ってもすぐに出てこないほど色々な課程の中の一つになってしまっているのです。それと同時に起こったのが大学院重点化です。92年から93年、東京外国語大学が博士課程を創ろうと思っていたのですが、文部省がなかなか認可しなかった。つまり「新制大学には博士課程を作らない」という不文律があり、私も何回も交渉してようやく博士課程ができました。しかし大学院を重点化した為に、学部が空洞化して大学の先生方が大学院に籍を移してしまいました。確か一般教養の先生と専門課程の先生は国立大学では若干の給与の差がありました。しかし外大では小さい大学だからやめようと全部平準化していました。そういう現象があり大きな転換期がくるのですが、教養教育や外国語教育の軽視という、まさにグローバル化と相反する方向に行ってしまいました。学部が空洞化する。大学院教授が学部に出前出張する様なものですよね。ここにも大きな問題があり、特にその中の外国語教育と教養教育がスポイルされたことは非常に大きいと思います。

それから日本は2004年に国公立大学法人化が行われました。これは2004年国際教養大学（英語名は Akita International University, AIU）の開学の年

ですが、私は当初から法人化にする以外にはないと思っていました。なぜなら、「教育公務員特例法」では、国家公務員や地方公務員でなければ、国公立大学の先生になれないのです。そんな事をついこの間まで日本の大学はやっていたのです。私から言わせると、戦後の教育関連法の中で一番問題の多いのが教育公務員特例法です。だから私が東京外国語大学学長の頃には26言語のネイティブの先生はいわゆる文部省が発令する教授ではなかったのです。外国人教員という別のカテゴリーでした。大学という所は人種、民族、性別一切の差別のないアカデミックな自由なコミュニティでなければいけないのに、日本の大学はグローバル化が始まって立ち遅れただけではなくて、2004年まで、国公立の大学では外国人は学長や学部長になれなかったのです。このような事をやってきたわけですから、日本は世界の大学から立ち遅れるのも言うまでもありません。

さて、そういう現状を踏まえて我々は国際教養という International Liberal Arts を唱導して参りました。まさに Liberal Arts は旧制高校以来の伝統のある教養教育に加えて、まさに今の時代、いわゆるグローバル化の時代を目指す International な Liberal Arts でなければいけないという事から、国際教養という新しい教学の分野を立ち上げたわけであります。テクノロジーの進む時代、ITの時代、これが進めば進むほど実は教養教育 Liberal Arts が必要ではないかと思うのです。

国際教養大学の挑戦

国際教養大学で行われている授業はすべて英語でやっています。例外を作りません。中には英語で授業をしていて学生がついてこられるか、あるいは外国人が半分以上いますが、日本人教員の英語力は大丈夫か、色々心配をする方がありますが、まったく大丈夫だと言っていいと思います。また、学生は英語で授業を受ける為の調整として、入学式直後から TOEFL の試験を2回受けて、英語の能力によって組分けをします。人によって能力に違いがあります。アカデミックリーディングがなかなか出来ない、英作文であちこちにミスが多いと、もう1回 TOEFL (PBT) で

500点を取らないと、教養科目に進むことができません。次の関門は1年間の海外留学、これは全員に義務付けていますので海外留学をする為には TOEFL が550点なくてははいけません。最近アジアの大学も結構レベルが高く、日本の大学もうかうかしていると負けてしまいます。先日、私は北欧に行っていました。ノルウェーのオスロ大学、それからベルゲン大学、ラトビアのリガ大学など、非常にレベルが高いのです。そこに入るには TOEFL 550点では駄目なので大体580点くらいが必要です。中には600点を取らないと受け入れてくれない大学もあります。そこに行く為に学生たちはものすごく勉強するのです。今、140校前後と交流協定を持っていますが全部生きています。先生同士で交流協定を結んだとしても、その先生が退職してしまうと切れてしまうので国際教養大学は必ず学長、副学長あるいは国際センター長が現地で授業のカリキュラム、寮があるかなどもよく調べ、細かい詰めをやって協定に調印します。国際センターも24時間いつも提携校と連絡を取れるようになっており、1人1人の学生が今どこにいてどれだけの単位が取れているか、全部わかるようになっています。国際教養大学は1学年175名定員という小さい大学ですが、将来的には200名位にして1000名位のユニバーシティタウンが出来れば良いと思っています。キャンパスには常に多くの留学生がいます。アメリカでは州立大学でも授業料がものすごく高く、U. C. Davis へ学生を送ると1年間の授業料が288万円でした。国際教養大学は69万円ですから、アメリカと比べると5～6倍も違うわけです。そうすると先方は1人の学生を受け入れるとその分赤字になるわけですよね。したがってこちらからは1人出す代わりに相手校からは3～5人受け入れることによってそのバランスを取るのです。そういう形ですから逆にキャンパスには常に留学生が多いのです。また、セメスター制をとっているのでも9月入学もあり、この9月1日には116名の留学生がやってきました。そして残っている留学生や海外に1年生から入ってくる留学生を合わせると130数名が常におります。

入試制度もユニークな事をやっており、センタ

一試験の前期後期からは開学以来離脱しています。センター試験の前期後期は法律で決まっているように思われるかもしれませんが、一切法的根拠はないのです。これは国公立大学が私学に対して、初めから優秀な学生を囲い込む為の1つの護送船団方式であって、大学入試はそれぞれの大学が個性を発揮すべきだと思っています。それから暫定入学というのがありまして入試は1点、場合によっては0.5点で切られます。しかし、それで果たして学生や若者の人生を決めて良いものなのか、という忸怩たる思いがあるものですから、合格点には達していないが英語だけ見るとセンター試験は満点である、というような学生を暫定入学で合格させ、制度的には特別科目等履修生として学んでもらいます。そういう形で入試の制度を設けています。1年間は授業料を正規生と同じく払ってもらいます。そして平均点以上取ると2年目に初めて入学金をもらう。これは非常に効果があり、暫定入学で入学した学生はすごく伸びが良いです。また、本学は16種類の入試があり、6回は併願できるのです。その中には最近話題になっているギャップイヤー入試があり、これは非常に効果があります。11月にギャップイヤーの試験をし、3月までの間に自分がどうしてギャップイヤーを望むかその理由に従った学習をして、それから4月から9月までの間に自分であちこち行って来るのですね。もちろん日本国内で農場に行く学生もいるかと思えば、先日、「ガーナという国はこういう国でこういう問題を抱えている。自分は将来是非ガーナの貧困を救う為にそういう人生を歩みたい。」と言っている学生がいました。

今の大学は都会の真ん中にビルを建てればもちろんそれで成功しているところもありますが、本当は自然の中の環境とか景観が非常に大事ではないかと思って、AIUは秋田杉の森の中という環境なのです。学長室から1分歩くと春は水芭蕉の群落が咲き誇り、目の前の中央公園はかなり広々と使えます。それからもうひとつ体育にも使う多目的のホールには、共にコンサート仕様になっています。国際教養大学はアメリカの多くのカレッジがそうであるように、音楽や美術をかなり重視しています。渡辺玲子さんの様な世界的なバイオリニ

ストが今学期は10数人を教えています。また、秋田杉でできている木造図書館は学生が勉強する為に24時間365日開いています。大学には門も扉もありません。垣根もありません。どこからでも入れます。門衛さんが玄関にいて「ご用のない方は入らないでください」何て事は一切ありません。周囲に開かれ地域に開かれ世界に開かれている大学ですから、一般の市民の方も図書館を使う事ができます。秋田空港からも近く、東京から飛行機で50分です。しかもソウルとの間に定期便がありますので、U.C. Berkeley から来る外部評価の先生等はサンフランシスコ～ソウル～秋田ですよ。そうするとすごく時間が節約できる。地方でもこういう形で動いており、常に世界と繋がっているのです。

国際教養大学における教育目標と探究方法、これは学内で議論し最終的に私が決定しました。特に教育目標の中に外国語コミュニケーション能力の熟達を最初に出してあります。しかも英語と言わずに外国語と言っているのは、国際教養大学では第2外国語も習得できるようになっており、ほとんどの者がそれを習得しています。それから人文学的、芸術的視点等からグローバリズムの中でクリティカルシンキングが大事なのだという事、そういう所を最終的に求めています。

カリキュラムの特色は、先ほどの英語集中プログラムが終わらないと基盤教育に進めません。基盤教育に進んでもあくまでも教養教育中心だと思います。専門教養教育はグローバル・ビジネスとグローバル・スタディーズがありますが、それは教養教育の一環としての専門であって本当の専門は就職する人は社会で、あるいは就学する人は是非大学院に入って学んで欲しいと思います。そして学部生はリベラルアーツ、そして大学院はリベラルアーツを経た人が進むというシステムを目指しています。その間の1年間で留学するのは単に1年間外国に行くだけではなく、124単位が卒業単位ですから、そのうちの4分の1、約30単位を取得するのです。これがまた大変で、外国のトップクラスの大学で英語で授業を受け、しかもその単位を認定されてくる。そして卒業です。今年は卒業率が47%でした。しかし学生からは一切

不満がありません。留学して帰ってくると留学生活の1年間をレポートにまとめたり、 Semester制を取っていますから夏卒業でも皆就職が決まっています。女性が多いのですがほとんど総合職で就職しているという状況です。これは昨今話題にもして頂いたのですが、人材育成企業が注目する大学として、国際教養大学が全国で首位になったという日経新聞(2012.7.16)一面の報道です。私にとって嬉しかったのは、東大の3倍位の得点を稼いだこともあって、New York Timesが Japanese Universities Go Global, but Slowly と言って、国際教養大学を中心に取り上げてくれたことです。日本の大学がNew York Times(2011.7.29)にこのように紹介されるという事は非常に珍しい事らしく、アメリカの提携校から色々電話がかかってきて「今日のNew York Timesを見たか?お宅がこんな大学だとは思わなかった」というような電話も頂きました。また、翌日にはInternational Herald Tribuneに写真入りで掲載されました。

外国語(英語)教育の在り方

英語教育の実践的な所になりますが、外国語は1 Semester60時間で2単位です。一般のレクチャーとセミナーは45時間、たいていの学校の場合には50分~1時間ずつで分けていますが、普通の講義は45時間やる場合に75分授業を週に2回行ってもらいます。それで15週行くと3単位になります。外国語は授業時間が多くても単位が少ない。大学設置基準がそうなっているのでやむを得ないですね。あと1単位を学生の自学自習に任せており、LDIC(言語異文化学習センター)では、中国語・韓国語・モンゴル語・ロシア語・スペイン語・フランス語だけではなくて世界30数カ国の言語がいつもテープで聞けるようになっています。非常に設備が整っており、自学自習をさせる自主単位はすごくいいのです。もちろん先生はアドバイザーとして付きます。そのことによって大体AIUの学生は留学する前にBBCとかCNNのテレビやラジオの放送を聞いてもほぼそれが理解できるようになります。

そして、やはり Vocabulary が非常に重要な

です。新しい学習指導要領では中学で1,200語になりました。ゆとり教育で1番ひどい時には400語位でした。高校で3,000語、そして国際教養大学では、最低でも8,000語以上の習得を目標にしています。できれば10,000語位。ネイティブの知識人で一万数千語の Vocabulary を持っているそうです。これについては国際教養大学で「英語教育にとって Vocabulary の数はどの位あるべきか」という国際シンポジウムを致しました。その結果こういう目標を掲げました。それから先ほどの外国語ですが、Mother Tongue, English and one area Language という三言語主義、これを非常に推奨していきまして、60時間1 Semester やりますと初級が習得できます。秋に60時間やりますと中級、そして冬学期に、例えば Korean Languages 3 というのをやりますと上級にいきます。そのような学生は大体、高麗大学やソウル国立大学などの大学に留学したがるのです。そうすると向こうでは、英語で授業を受けてきますが、毎日朝から晩まで韓国社会にいるわけですから、韓国語が日本語と割合共通する事もあって、帰ってきた時には英語以上に韓国語ができるようになっています。またノルウェーに留学中の学生でノルウェー語を学んでいる学生達がいるのですが、北欧の大学はほとんど英語で授業やっているけれども、中でもノルウェー語の単位を取った場合にはノルウェー語を地域言語として単位になるようになっています。

皆さんご承知の様に Plurilingualism 複言語主義がいかにこれからの時代に必要か。外国語はできるだけ幼児教育からやった方が良いでしょう。私は、たまたまスズキ・メソッドの才能教育研究会の会長をしている事もあり、英語の幼児教育と音楽の幼児教育は非常に相関性が高いとみています。これは Common European Framework (欧州協議会) が作った Plurilingualism についての定義です。It opens the mind, stimulates intellectual ability and, of course, expands people's cultural horizon. Multiculturalism is part and parcel of both European identity/citizenship and learning society. ヨーロッパは確かに言語の壁が低いとは言え、これはまさに日本にも当てはまるのではないかとこのように私は考えています。その為には、これから小学校英

語、中学校英語でALTをもっと活用しなくてはいけないし、秋田県の知事や教育長にもよくお話ししているのですが、ALTをもっと増やして欲しいと思っています。

秋田県は、小学校中学校の成績が5年続けて全国1位なのです。特に秋田県の目立つ所は小学校教員になる為に2次試験のなかで英会話の試験を課しています。おそらく日本の多くの小学校の先生、中学校の先生、教科以外の人、今までは中学以上ですけど、英語を全く受けなくても先生になれているのです。こういうグローバル化の時代で、これだけ英語が必要な時に教員になるには当然ある程度の英語の基礎は作っておいてもらわないと、学校の先生になる資格がありません。そのように持っていくべきで、秋田県はそれをやっています。

私は文科省の外国語専門部会の主査をやらせて頂いて、私自身の提言があまり思うようにいかなかった点もあります。私はこれほど英語が大事なことから、5、6年生は今のような特別活動で成績を付けないのではなく、算数や国語と同じくらい重要性を持っているわけですから、それを教科とすべきだというのが私の考えです。そして1、2年生は特別活動でもよいし、3、4年生は国際理解教育の時間をそれに使ってやるべきだと。よくある意見は英語を始めると日本語に影響があるのではないか、日本の事が学べないという意見がありますが、まさに国際理解教育ならば、日本のテンプルとかシュラインでもよいし、華道でも茶道でも日本の色々な美意識でもよいですよ。そういうものをやさしい英語で教える事は非常に重要だと思っています。

国際教養大学の全学必読文献は新渡戸稲造の「武士道」です。それで「武士道」を英語で読ませる。先日、国際教養大学の学生が図書館で「1番読んでいる本は何か」というアンケートをやりましたら、「武士道」がNo.1で、学長としては非常に嬉しいことでした。「武士道」15章にある本居宣長の「敷島の大和心を人間はば朝日に匂う山桜花」というのは、原文はかなり難しい英語になっていますが、「やさしく英訳すればよいのだから、君達暗記しなさい。そうすれば外国に行った時にも非常に役に立つよ」と申し上げています。

それと中学校への接続が必要なのではないかと。小学校の英語の規格が今のままだと、中国はもとより、台湾、韓国からも遅れてしまいます。私の調査では中国では2005年から小学校3年生から全国で実施しています。台湾も小学校3年からです。台北市に限っていうと小学校1年からやっています。それから韓国も1997年度から小学校3年生からやっています。そして行っている時間が違うのです。日本のように30~35時間を1年間やるというのではお遊びにしか過ぎません。本当にやるならもう少しきちんと腰を据えて魂を入れてやるべきだと思います。そういう意味でも、英語ができるかできないか、若者をいつも英語コンプレックスの中に置いておくのかどうか、これはまさに日本の国益にも関わることだと思うのです。

大学経営の特色

国際教養大学はすべての教職員が任期制(3年)なので、テニユア制は今後の労働法の改正によって見直さなければと思います。また、学長のリーダーシップの下に教授会は学期の始めと終わりに30分位で済むようになっていて、先生方は教育と研究に専念して頂けるようになってきました。細かい事はAAEC(教育研究会議)と大学経営会議で審議します。年俸制を取っていますので、エバリュエーションによってその年の給料が10%~20%上がったたり、下がったりすることもあります。エバリュエーションのシステムが非常に透明性のあるものになっていますので、同じ論文発表でもレフリー付の論文や、同じ学会発表でも国際的な学会であれば、高い評価が付くようになってきました。人事権は教授会にありません。最終的に学長と大学経営会議です。したがって学長は必ず人事に関しても面接を致し、模擬授業を必ずやって頂きます。小さい大学だからこそ、そういう事ができるといってもよいのではないのでしょうか。

以上をもちまして私のプレゼンテーションを終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

(なかじま みねお/国際教養大学)

英語 展望

E L E C B U L L E T I N

NO. 120
WINTER
2013

ELEC賞授与式 特別講演

吉田 研作

「確かなコミュニケーション能力を育成する
英語教育のあるべき姿」

定森 幸生

「グローバルリーダー育成と企業内英語事情」

ウェンドフェルト 延子

「日本の学校でのIB実践」

山本 新治

「世界に通用する人材育成 — 海外帰国子女教育から見た視点を含めて」

大谷 泰照

「日本の英語教育とグローバル人材の育成 — 東アジア地域の現状から考える」

ELEC 英語教育シンポジウム

基
調
講
演

「グローバル人材育成における英語教育の役割」

中嶋 嶺雄

パ
ネ
ル
発
表

「グローバル人材育成と学校教育現場での取り組み」

市村 泰男 × 本名 信行 × 桑原 洋 × 田淵 エルガ
司会：阿久津 一恵

❖ 小池 生夫 「清水護先生への感謝と追悼」

特集 グローバル人材育成と 日本の英語教育

英語教育の情報と資料 (56)

田中 春美「国際語としての英語を教え・学ぶには」

English Teaching Forumを読む

佐藤 之美

ELEC賞と私

杉田 由仁

2011年度ELEC賞受賞論文

B部門：飯塚 秀樹 [自治医科大学] / 長橋 雅俊 [駿河台大学]

書評



『成長する英語教師』

高橋 一幸著 (大修館書店)



『Introducing Second Language Acquisition (2nd edition)』

Muriel Saville-Troike著 (Cambridge University Press)



『英語で話すヒント — 通訳者が教える上達法』

小松 達也著 (岩波新書)